

発生予察情報

特殊報第1号

平成22年7月29日
秋田県病虫害防除所

コムギ条斑病の発生について

1. 病虫害名：コムギ条斑病 *Cephalosporium gramineum*

2. 発生作物：小麦

3. 発生の経過

平成22年5月に県内の小麦ほ場において、葉、葉鞘への黄色条斑、下葉枯死、導管の褐変症状が確認された。特に葉身に現れた黄色条斑が葉鞘にまでつながっていたことから、コムギ条斑病であることが疑われたため、北海道大学に同定を依頼したところ、本病であることが確認された。

コムギ条斑病は昭和6年に岡山県で初めて確認され、その後中国地方、四国地方、関東地方、東北地方、北海道へ拡大しているが、本県での確認は今回が初めてである。

4. 病徴

消雪後間もなくから発病する。はじめ、下葉の葉鞘から葉身にかけて黄色の条斑が葉脈に沿って現れる。

黄色の条斑は1枚の葉に1～3本生じる。

条斑は下位葉から上位葉に現れる。発病の激しい株は萎縮し、穂は出すくみ症状となる。開花しても結実しないで白穂となることが多い。

5. 発生生態

病原菌は主に土壌伝染する。

病原菌は発病株全体に分布しており、耕起などによって地中や地表に分散し次作の伝染源となる。

播種後、病原菌は根から侵入し、導管を通過して次第に上方に移行し、茎葉に達すると条斑を生じる。また、導管内で孢子形成を行い、孢子は穂へも移行する。

発病株は短稈になるとともに、1穂粒数、1穂粒重が低下し減収する。

種子の表面や内部に存在する病原菌により、まれに種子伝染する。

6. 宿主範囲

本病は麦類の他、多数のイネ科植物に寄生する。典型的な条斑を形成するのは小麦、ライムギ、カラスムギであり、他の宿主植物は明瞭な条斑を形成しない。

7. 防除対策

種子伝染性の病害でもあるため種子更新を行う。

ベンレートT水和剤20を種子重量の0.5%粉衣し、種子消毒を行う。

連作により被害が大きくなるので、連作を避ける。

30日以上湛水することによって土壌中の病原菌量は激減するため、田畑輪換を行う。
田畑輪換できないほ場では、イネ科以外の作物を2～3年作付けする。
発病株の早期抜き取りに努め、発病茎葉をほ場内に残さないように処分する。
発病ほ場で使用した作業機械を他のほ場で使用する場合は、伝染防止のため作業機械を丁寧に洗淨する。



写真 葉鞘から葉身にかけて葉脈に沿って現れた条斑

【問い合わせ先】

秋 田 県 病 害 虫 防 除 所 0 1 8 (8 6 0) 3 4 2 1
秋 田 県 農 林 水 産 技 術 セ ン タ ー 農 業 試 験 場 0 1 8 (8 8 1) 3 3 2 6
掲 載 H P <http://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>